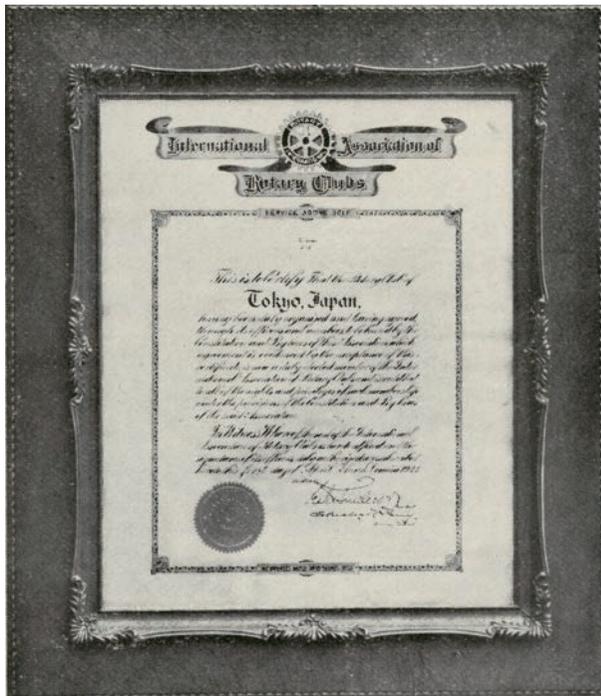




「東京ロータリークラブの歴史」
(英語版6巻)



東京クラブのRI加盟認証状

CHARTER

No.855 The Rotary Club of Tokyo, Japan

1920年 東京RC創立総会開かれる

1918年1月、政府特派財政経済委員の一員として渡米していた米山梅吉は、ダラスの福島喜三次宅で正月を迎える。この時の福島との出会いが、その後日本にロータリークラブが創立される発端となった。1919年12月、福島は帰国に際し、ダラスRC会長は東京にロータリークラブを設立すべく国際ロータリーに進言し、福島は特別代表を委嘱される。しかし、期限経過するも準備が整はず、期限延長申請と合わせ米山に全権を一任する。米山は、翌年8月にロータリー創設について説明。9月に設立準備会開催。10月20日に東京ロータリークラブの創立総会が開催される。

米山はチャーターメンバーに一流の人を集めてクラブを作ったものの、例会は月に1回しか開かれず、クラブとしては不十分な活動状態であった。東京RC塩原禎三氏は「設立当初の東京RCの運営から見れば、会長としての米山は皮相的には落第と云うべきであろう」(「東京RC創立について」ロータリーの友1969年3月号)と言う。

しかし、1923年9月1日に発生した関東大震災の時に世界各国から寄せられた善意により、ロータリーの力をあらためて実感し、この年の11月から例会が毎週開かれるようになった。正に、国難を乗り越えてロータリーの存在意義が示された。

東京RC創立以来、毎週例会の報告をRIに送付するため、週報が作成された。これは、世界の各クラブ会員に読めるものということで英文であった。関東大震災発生により発行が困難になったが、外国からは週報を寄贈されていた。1925年5月から北島亘氏によって発行されるようになった。ガリ版刷り5～6頁というので、外見は立派なものではなかったが、ユーモアに富む内容は好評で、執筆者北島亘氏に面会申し込みもあったという。この貴重な週報をまとめた「東京ロータリークラブの歴史」(英語版6巻)は、当館で所蔵している。

ピアニスト フジコ・ヘミング氏 米山梅吉を語る ～あの日あの時、そして今～

2019年6月4日、米山梅吉記念館創立50周年を記念して、ピアニストフジコ・ヘミング氏のお宅を訪ね、お話を伺ってきました。フジコ氏は、米山梅吉が創立した緑岡小学校（現在の青山学院初等部）のご出身です。当時の学校の様子、米山梅吉校長との思い出、厳しいながらも愛情溢れるお母様との関係、そしてピアノと共に生きてきた人生を語ってくださいました。インタビュアーは、米山梅吉記念館創立50周年記念出版『米山梅吉ものがたり』の著者 柴崎由紀さんです。

S：絵日記はずっとつけていらっしやるそうですね。

F：小学校のときの絵日記もこんなにあるんですよ、「今日は歯医者に行きました。痛いでした」そんな具合よ。

S：初等部の時に書いていたのも絵日記ですか？

F：絵日記よ。

S：それは他の人も書いていましたか？

F：他の人のことは知らない。親が助ける人もいるからね。絵の時間が一週間に一回あったのですよ。鳥のキジの剥製があってそれをみんなで写生して、一時間経つと先生がそれをみんなまとめてしまっちゃうの。家に持って帰ると親が助けるから信用ならないといって。私の絵が学校中で一番になって金賞ももらって金が貼ってあった。その時から私はすごく絵を画くのが得意でした。でも父が絵も描いていましたから、絶対子どもは絵描きだけにはするなって言い残してヨーロッパに帰ったというから。強制送還みたい。あのころは戦争中で秘密警察に追っかけ回されて大変だったらしい。母も年中私を連れて警察に呼ばれて、母が泣きわめいているのを見て、何を悪いことしたのかと私もしくしく一緒になって泣いていたことがあって。そんな時代だった。



S：そうですね。

F：でも学校はすごく楽しかった。

S：それは初等部ですか？

F：初等部です。

S：ご本の中で、米山梅吉校長先生が外人の子供達の頭をなでてくれたと書いていらっしやいますか？

F：1クラス30人くらい。その中にイギリスの子と中国人の子と私がいた。米山先生は入ってらっしやると私たち3人のところへわざわざ歩いてこられ、私たち3人の頭をなでて下さいました。忘れられなかつ

たのは「人にされてイヤなことは自分もしない」っていつも言っていて、私、子どもながらに感激しました。人間はそれだけやっていたらいいのに、みんな忘れちゃって人を傷つけて喜んでる人が多いから。私のクラスの中にはお寺の子、歌舞伎の延寿太夫の娘さん、鈴木さんという大臣の娘もいて、みんないい家のお子さんでした。教育がよくできていて、誰も私をいじめたりしなかったですね。学校の帰りあるところへ行くと、そこの子が待ち伏せして、私たちがくると「異人」といって石をぶつけて怖かった。

S: そうなんですか。緑岡小学校の子たちはそんなことしなかった?

F: ああ、ぜんぜん。それどころか私の担任の先生は涙を流して小声で「戦争なんかするもんじゃない」って、戦争反対の話しをしてらっしゃいました。クリスチャンの人が多かったから。

S: 他に初等部の思い出はどんなことがありますか?

F: 土曜日に合同体操というのがあって、全校で鬼

ごっこするんです。子どもながらにすばらしいと思った。

S: 初等部はどんなところが良かったですか?

F: すべてがこじんまりとしてた。先生もおっかなくなかった。よい時代だったから。今の子どもってみんな腕時計や携帯持っていて無いものないでしょ。私たちの時代は、こんな金持ちの子ばかりなのに、ひとりとして腕時計持っていないし。東横線で家へ帰る人がみな定期をぶら下げているのだけが目立っていた。一年に二回くらいお祭りがあるじゃない。これは区、地域のお祭り。私のところは渋谷穂田区で、太鼓がどんどこ鳴り出すと胸がわくわくして神社に遊びに行く夜店がいっぱい並んで、母がお金をくれて、何を買ったらいいだろうと思ってね。すごい楽しかったのを覚えている。でもお金のことをいう人なんていなかった。ドイツへ留学した時、道端で子ども同士がお金のことで大喧嘩して殴り合っているのを見て、「わー、日本じゃこんなのないな」と思った。

S: なぜ、緑岡小学校に入られたのですか?



『フジコ・ヘミング 14歳の夏休み絵日記』より

F：母が私たち混血だからと。母はお金がなかったけれど、おばあさんの家がすごい金持ちで、そこから仕送りがきたのね。歌舞伎の延寿太夫の娘なんて邸宅で大名のようなところに住んでいて。でもみんな親切で私を呼んでくれて。直ぐ近くには梨本の宮様のご邸があって、その後ろに鈴木さんという大臣の娘がいて。その人はすごい美人だった。おもちゃがものすごい。彼女の特別な部屋があって、お人形だけでも20も30もあるの。私は、一個のお人形を買って貰うまでクリスマスまで待たなければならぬじゃない。女学校に入ったらその人総代になっていた。

S：すごい記憶力ですね。

F：私、他人のこと見たり聞いたりするの好きだから。



S：初等部の音楽会ではピアノを弾いたことがありますか？

F：学校中でやる音楽会があってそこで弾きました。10歳のときにはNHKから頼まれて、あのころは全部生放送、よく弾いたなど。今、生放送なんてぞっとする。

S：テレビ放送？

F：そのころテレビなんてないわよ、ラジオ。

S：愛宕ですか？

F：銀座よ。NHKの放送センターがあったのよ。戦争が終わってからは芥川也寸志さんと共演したりしました。女学校に行くようになってから、耳が病気で聞こえなくなってイヤでした。母も仕送りがあったけれど、戦争で工場がダメになって大変だった。明治神宮の隣にアメリカ人のワシントンハイツというのがあって、そこにいっぱいお弟子さんがいて、毎日教えに行っ

ていました。私はアメリカ人が大好きでアメリカに憧れていたけれど、母はドイツドイツと言って、ベルリンがどんなに素晴らしいかしかなかったから、ベルリンに行ってがっかりした。

S：お母様はフジコさんにも厳しかった？

F：ものすごく厳しかった。子どもは言われてやっているからそんなにさらって来ない。すると母が怒鳴って「この前と同じじゃない」なんていって泣いていた。私は絶対あんな教え方はしないと。ドイツでも一杯教えたけれどそういう教え方はしなかった。

S：お母様はご姉弟にいつも「馬鹿だ馬鹿だ」と言っていたと書いてあります。今は褒めて育てるといいますが、それがバネになったと思いますか？

F：いやあ、私は害になったと思うんです。母はまったく私のことを理解しなかった。純粹な人だったけれど、褒めたことがなくて、いつも私の演奏にけちをつけてすごくイヤだった。一日中、「馬鹿」とか「阿呆」とか母から言われて、40過ぎるまで私は本当に前代未聞の馬鹿だと思っていた。ストックホルムで、先生になる学校に行き、知能検査みたいなのがあって一番になったの。その時初めて、私、馬鹿じゃないんだと勇気がでたの。私を認めてくれたのが伯母です。静かな伯母がいつも「フジコは馬鹿じゃないんだ」って母に言ってるのを聞きました。母は兄弟が五人くらいいて、彼女だけが変っていたらしいのよ。がみがみ女で、こんなのお嫁に貰う人いないからって外国へ行ったらしい。

S：でもそのお母様だったから、という部分ってありますか？



F：私はすごく臆病なんですよ、弾いていてもどこかで間違えるかもと。ピアノを弾いているとき、ピアノの中から「馬鹿あ」という声が聞こえたことがあるの。

S：常にお母様の目があるという。

F：私は母を好きでもあるし嫌いでもある。

S：演奏にお母様の影響もありますか？

F：母は純粹で清らかな人というのは確かです。なんでも思ったことをすぐに話しちゃう。彼女のレッスンをみていたら、お弟子さんが弾いている横で「あなたのお化粧はとんでもない。服も悪趣味」などとずけずけ言うのよ。そういう人だったのよ。

S：教えるのは好きですか？

F：演奏するほうが楽。音楽学校でも教えていました。子どもは好きなのよ。

S：初等部には礼拝の時間がありましたか？

F：食事の前に祈りました。

S：フジコさんはキリスト教ですか？

F：母は仏教だった。日曜学校に行っていた。ほんとに豚小屋みたいな教会だった。牧師が普通の背広を着ていたけれど、神様のように見えて信じました。伯母もみんな仏教だったけれど、神様とか仏様とかいっていたから自然にそういう風になって。

S：スーツをきた牧師さんがいた教会の名前を覚えていますか？

F：バプテスト原宿教会、明治神宮の近く。パリの家の近くは教会がたくさんあって、ノートルダムも見える。ドイツで教えている時、カトリックのある教会に入った。私は青山だからカトリックではなかったけど。その牧師がすごくよい声でグレゴリアンを歌うんです。その人に洗礼してもらってカトリックになったのよ。ある大きな教会に入った。友人が「あそこはカトリックじゃないよ」って言ったけれど、「同じよ。みんなパンをもらってお酒を飲む。なんでもいいんだって」言ったのよ。私は年をとるまでカトリックじゃなかったんだって。宗教同士で喧嘩するなんてばかげた話じゃない。

S：今まで大変な目にあってこられましたけれども、どこかで神様の存在は常にありましたか？

F：いつも感じました。お化けも見たとし。TVなんかで神はいなかった、なんていうけど、すごい数の星があるでしょ。お金と時間をかけて行って砂しかなか



ったなんて。ここにだけ人間が住んでるわけがない。あんなことテレビでいうなんてがっかりしちゃう。見えるものだけを信じる人が多いでしょ。

S：乗り越えなければならぬものに出会った時に、神様の存在を信じますか？

F：弾いてる最中でもいつでも祈ります。

S：祈るというのは感謝ですか？

F：そうじゃなくて、間違えないで弾けますように。

S：レパートリーは何曲くらいありますか？

F：1曲で40分かかるものもあれば、小曲は5分くらい、30か40曲はありますね。毎日繰り返して弾いてないと忘れちゃう。言葉だってそうでしょ。年中やってないとだめ。

S：それで一日4時間くらい練習される。

F：それが理想なんだけど。昨日は二時間かな。

70年以上前のことを、昨日のこのように話してくださったフジコ氏。ご自身たちの置かれた境遇や、当時の日本の状況を考えると、大変なことの連続だったと思います。しかし、時代の波に翻弄されながらも、常に前向きに生きてきた人生を淡々と語るフジコ氏のお話は、聞く人の心にじっくりと沁みてきました。

少女時代から、自分で洋服を縫ったり、リボンをつけたり、とオシャレさんだったフジコ氏。年齢を重ねてなお、その笑顔はチャームングでした。



間島記念図書館(青山学院)



旧鎌倉図書館 正面

青山学院から鎌倉へ —図書館が繋ぐ学恩—

図書館とともにだち・鎌倉 会員
鈴木保美



間島弟彦をご存知でしょうか？

間島弟彦は、1871（明治4）年生まれ。東京英和学校を経て、アメリカに留学。

帰国後に第十五銀行入社。その後、米山梅吉氏の誘いで三井銀行に転じて横浜支店長、常務とキャリアを積みます。関東大震災により焼失した青山学院の図書館再建にあたり、当時鎌倉療養中であった間島が寄附を申し出ました。1928（昭和3）年、間島は逝去しますが、愛子夫人がこの遺志を継ぎ、遺言執行人であった米山梅吉氏の力添えにより、1929（昭和4）年にこの図書館が開館します。完成した図書館は間島記念図書館と名付けられました。現在、青山学院の資料センターとして使用され、国の登録有形文化財にも指定されています。

また、間島没後愛子夫人により寄附された遺産を元に、1936（昭和11）年、鎌倉・御成小学校敷地内に町立図書館が完成しました。1974（昭和49）年に現在の中央図書館が開設されるまで、長く市民に親しまれてきました。この古い建物の行く末が、今危ぶまれて

います。

私は、初等部から大学まで青山学院で学びました。昭和33年に入学した初等部では、入学した時に撮る最初の写真から、卒業する最後の写真まで間島記念館前で撮影されていました。毎朝の礼拝で利用する米山講堂では、米山先生の写真が私たちを見守っていました。初等部の先生方も、よく米山先生の言葉を語っておられました。小さい頃から自然と身のまわりにあった青山スピリットは、いまでも私の心に生き続けて



初等部入学 昭和33年4月（一年生梅組）
2列目左から2番目が筆者

おり、同級生と話しをするたびに懐かしく語られます。

今から40年ほど前、「鎌倉を愛する会」に携るようになりました。鎌倉は昭和30年代から高度経済成長のひとつの現象としてあちこちで宅地造成計画が持ち上がり、鶴岡八幡宮背後の山林「御谷（おやつ）」の自然や史跡も壊されそうになりました。これに対して地元住民を中心に、市民や文化人らが反対運動を展開した「御谷騒動」。「鎌倉を愛する会」はその活動を持続するためにできた団体です。「愛するが故に学び、学ぶが故に知り、知るが故に文化遺産や自然環境を守ることを誓う」という目標を掲げ、青山学院の三上次男先生が中心となり、永井路子さんなど錚々たる顔ぶれが集まり、約120名でスタートしました。当時私は、最年少での会への参加でしたが、この会での40年の活動が、私と鎌倉を深く結びつけたのでした。

2015年2月、鎌倉で「旧図書館の保存と活用」のためのシンポジウムが開催されました。その時会場に配布された『旧図書館と私』という小冊子には、旧図書館への熱い想いととも、間島弟彦を顕彰する文が多く寄せられていました。

間島弟彦については、旧図書館以外にも鎌倉国宝館や英勝寺山門に関わった篤志家として名が知られていましたが、銀行家であり育英事業を志した間島の幅広い活動や文化交流、特に教育分野への貢献などは知られていないことが沢山ありました。



青学日文見学会 英勝寺

旧図書館の修復保存という方針は決まったものの、具体的な動きにはなかなか発展していない現状です。保存活動の中心になっていたのは「図書館とともだち・鎌倉」（通称 ととも）です。この会には友人の阿曾千代子さんが参加されていました。阿曾さんに誘われ「鎌倉を愛する会」として保存運動に関わる中で、間

島弟彦のことを深く知るための勉強が必要であることを感じ始めました。

2019年2月、間島弟彦・愛子夫妻の生涯について研究された青山学院大学の杉浦勢之先生の講演会が「ととも」主催で開催されました。先生は愛子夫人の生い立ちについてもお話しされました。

13歳で単身上京し東洋英和女学校に学び、キリスト教の洗礼を受けたこと。明治29年に結婚して家庭を築くも一子道彦の夭逝。その5年後の昭和3年には弟彦が結核で57歳の生涯を閉じるという哀しい別れ。愛子未亡人は夫の一周忌に和歌の師であった佐佐木信綱氏に撰を願ひ『間島弟彦集』を出版します。母校青山学院の図書館建設に夫名義での多額の寄附を申し出、さらに鎌倉国宝館、図書館、学校などにも寄附を続けました。これらすべてが夫の遺志を継いだ奉仕の精神のもとに行われたということ。後年には女性の文化諸般の発展向上をめざして設立された「東京婦人会館」の役員としても活躍したことなどを知り、「ととも」メンバーをはじめ多くの方が愛子氏の強い生き方に心を揺さぶられた講演会でした。

2019年の秋には「ととも」が企画を任せられ、青山学院大学日本文学科OBの「間島夫妻の遺徳を学ぶ会」が開催されました。これをきっかけに間島夫妻のことをもっと知りたいという熱意が高まり、どのような資料があるのか手探り状態の中、まず青山学院資料センターを訪問しました。既に青学では『小伝 間島弟彦』という本を出されており、「ととも」や鎌倉の研究仲間も参考にさせていただいておりました。資料センターでは保管されていた基礎資料を見せていただき、ご教示を賜りました。資料の中には弟彦氏の直筆書簡もあり、あまりの達筆に畏れ多く、拝見する手が震えてしまいました。また、愛子夫人については「遺された資料は少ないけれど、佐佐木信綱門下の歌人としての作品が同人誌『心の花』に収められているので参考にしたら」との貴重なアドバイスを頂き、早速『心の花』を検索。鎌倉市中央図書館にもお世話になりました。また、レファレンスの過程で『間島愛歌集』の存在を知り、その稀少な歌集が熱海市の図書館にあるとわかったときは喜び、「熱海なら近い!」と早速お訪ねして佐佐木信綱氏が寄贈した和装本を複製させていただきました。家族を想う歌は胸を打たれるものばかり。鎌倉の情景を詠んだ作品も多くありました。



白瀧幾之助画伯による間島弟彦・愛子夫妻

その日は慌ただしく、熱海から三島へ移動し駿東郡長泉町にある米山梅吉記念館を見学しました。米山梅吉氏はロータリークラブの創始者として有名ですが、間島弟彦とは青山学院の校友であり、生涯の親友だった人です。学芸員の方は「残念ですがここには間島関係の資料はほとんどありません」と前置きされながらも、間島夫妻に多大な影響を与えた米山氏の事績について詳しく教えてくださいました。また記念館に隣接する米山文庫こども図書館も案内して頂きました。間島夫妻と同じように、米山氏も自身の子どもを亡くし、図書館を建て、沢山の本を寄贈されていたのです。間島夫妻もよく短歌を嗜みましたが、いずれも短歌の師は佐佐木信綱氏であったこと。米山梅吉氏がよく知られている肖像画を描いたのが、間島の妹婿にあたる白瀧幾之助画伯であったことなど、間島と米山梅吉氏の接点があちこちで繋がっていきました。

弟彦氏は、父・冬道氏とともに歌人としても知られていました。大正十年一月、米山氏は長男東一郎を亡くします。このとき、弟彦氏は

大正十年一月、米山梅吉氏、長男東一郎を失はる。
一家悲風惨雨、慰むべき言の葉もなし

雄々し子の力漲るむくろより若き命を奪ひ去りぬ死は
という短歌を手向けています。ご子息を亡くされた米山氏に対して哀悼の意が込められ、同じ頃病の床にあった自身の長男道彦への思いを重ねて詠んだものでしょう。同じ年の10月、米山氏は悲しみにくれる間もなく、英米訪問日本実業団に参加して、アメリカに行きました。この時、米山氏はホワイトハウスにてハーディング大統領と会見したり、ロックフェラー研究所に野口英世を訪ねています。12月にサイベリア丸にて帰国の途につき

ますが、その航海中に、間島が無線電信で送った短歌に

サイベリア號にて帰朝の航海中にある米山梅吉氏に、大正十一年一月六日、無線電信にて送れるに
ひ年と君を迎ふるよろこびにまじらひ浮ぶ去年の
かなしみ

というものがあります。

これに対し、翌日に「米山君より返電あり」として
船は今黒潮の上を八洲さす通ひくる皿の胸にあた
たけし

と米山氏が返歌しています。個人的な悲哀を抱えながらも、重責を果たして帰国する三日前に 無線電信を使って短歌をやりとりしたという事実に、米山氏と間島の関係の深さと互いを思いやる絆を思わずにはいられません。これらの短歌は、愛子夫人によってまとめられた『間島弟彦集』に収載されました。

1953年(昭和28)には、愛子夫人77歳のお祝いに『間島愛歌集』が上梓されます。ここには

米山氏らと押出に行く
きぞふりし灰の色さへ山はだにさやかに見ゆる今
朝の浅間嶺
米山夫人とゆききて
來し人を家に送りてまた語る初秋の山居のどけく
もあるか

といった歌もあり、米山家とは家族ぐるみのおつきあいをしてきた様子が窺えます。この歌集には、佐佐木信綱氏が「ここには淑徳を積むことに生きがひを感じる日本婦人の、もつとも静かな心の表白がある」と記しているように、愛子氏も様々な苦難を乗り越えつつ、妻として、母として、そして一人の女性として生きた証が遺されています。

少しずつ資料や情報が集まり出した2020年2月、鎌倉NPOセンターで初めての会合が開かれました。目標として「サーバントリーダーとして鎌倉の発展に貢献した間島夫妻を顕彰し記録を残す」「間島夫妻の遺徳を伝え、旧図書館の保存・活用への理解を深めてもらう」「明治から大正・昭和を慈愛に満ちて生きた愛子夫人に学ぶ」などの意見が出されました。

今後、女性史やキリスト教史なども視野に入れながら、来年が生誕150年となる間島弟彦氏と、愛子夫人についての研究を深めて行きたいと思っております。

冊子「栃木の偉人 古澤丈作」について

栃木ロータリークラブ
大木 洋



ロータリアンで米山梅吉の名を知らぬものはいないであろう。しかし、古澤丈作のそれを知るものは少ない。1952年東京ロータリークラブ会長であった古澤丈作は、戦争でアジア諸国に多大な迷惑をかけた贖罪から米山基金を提唱、それが発展して米山記念奨学会となり、2万人もの外国人留学生を支援してきた。

古澤は栃木県栃木市出身であり、私が所属する栃木ロータリークラブは栃木市にある。しかし最近まで私を含めほとんどの会員が古澤のことを知らなかった。数年前ロータリアンで郷土企業人研究家の石崎常蔵氏（栃木西RC）がクラブ例会卓話で古澤を紹介してから、徐々に知られるようになった。2019～2020第2550地区（栃木県）川嶋幸雄ガバナー（栃木RC）は活動方針の一つに古澤丈作の顕彰を掲げ、古澤丈作顕彰会を立ち上げ、冊子の作成と顕彰碑の設置を目標とした。顕彰会でチラシを作成し地区内クラブはじめ地元の各施設に配布し、少しずつ認知度を高めていった。川嶋ガバナーは公式訪問時に必ず古澤について触れ、郷土の偉人を熱く語った。地区内クラブ、会員から多くの寄付が集まり、栃木駅前にて顕彰碑を設置することができた。昨年11月の地区大会時に、栃木市長、ロータリー関係者、古澤のお孫さん裕治さん恭子さんご夫妻ら大勢の来賓を迎え、栃木駅前にて顕彰碑の除幕式を行った。御影石の顕彰碑には古澤の顔写真、略



顕彰碑除幕式 令和元年11月9日

歴と米山奨学金のこと、ロータリーの神髄といわれている大連宣言がステンレスプレートで埋め込まれている。ぜひ見に来ていただきたい。

冊子「栃木の偉人 古澤丈作」はカラー16ページ、古澤の略歴、家系図、当時の写真、古澤に関する新聞記事等が掲載されていて、古澤を知る上には絶好の資料であり、著者石崎常蔵氏渾身の力作である。冊子は今春に完成していたが、新型コロナウイルス



の感染拡大により関係方面への発表と配布が遅れてしまった。このたび米山梅吉記念館に冊子を寄贈するにあたり、多くの会員に古澤丈作の偉業を知っていただきたく、拙文を書かせていただいた次第である。

余談ではあるが古澤の家は音楽家系である。次女淑子はパリのコンセルヴァトワールで声楽を学び、第二次大戦パリ陥落で苦勞し戦後はヨーロッパで歌手として活躍、帰国後はフランス歌曲の第一人者として人気を博した。昨年の地区大会RI会長代理水野正人氏（東京RC）歓迎晩餐会では、古澤淑子が得意としたフランス歌曲の演奏会を催した。東京ロータリークラブの水野氏とかつて東京クラブの会長であった古澤丈作の孫、裕治さん恭子さんご夫妻が、古澤の次女淑子が歌ったフランス歌曲と共に楽しんでいる光景は、私にとって感慨深いものであった。裕治さんご夫妻もちろん音楽家で、2月に行われたインターシティミーティングでは、裕治さん（クラリネット）恭子さん（ピアノ）の演奏会を楽しんだ。

古澤丈作の「大連宣言」

井口 賢明 (沼津北RC)



古澤丈作氏

1928 (昭和3) 年7月、日本、旧満州、朝鮮を1つとして第70区が設立された。当時、東京、大阪、神戸、名古屋、京都、横浜そして京城の7つのクラブしかない日本の区域に地区を設けるということに対してロータリー本部は難色を示した。しかし、当時の平生コミッショナーの熱意に押され、第70区が誕生し、初代ガバナーに米山梅吉が就任した。

同年12月、大連ロータリークラブが誕生した。大連ロータリークラブの創立に参加し、初代副会長となったのが古澤丈作である (会長は松岡洋右)。

今回発刊された冊子によれば、古澤は、明治14年4月8日、栃木県上都賀郡金崎村 (その後西方村…現栃木市) で、父古澤貞治郎、母せいの長男として生まれる。同33年3月、宇都宮中学校を卒業、東京高等商業学校 (現一橋大学) に入学、38年3月、同校を卒業し、合名会社大倉会社 (大倉組) に入社。大倉本社、呉支店に勤務した。同41年3月、大倉組大連支店創立に関与し、その後ロンドン支店駐在員となる。大正元年、日清豆糟製造株式会社 (後、日清製油と改称される) に転属となった。同社は、日露戦争後、豊富な農産資源に着目した大倉喜八郎らにより、設立されものである。

古澤は、大正2年帰国すると、同社取締役、大連支店長として、大連に赴任する。大連では、官選の市議会議員や大連商業会議所副会頭や会頭を歴任する。大正9年6月には、専務取締役となる。ところが、昭和2年3月の金融恐慌の影響で、同社は創業以来の大赤字となった。古澤は、専務を辞任することになるが、くしくも米山が社長の三井信託から120万円の借入れをし、再建を成し遂げる。

古澤は大連RC運営にあたり、ロータリーの真髓を究めるべく日夜、研鑽に励んだ。これは、自身だけでなく、

会員、さらには広く一般世間にもこれを理解して貫うための志向でもあった。古澤は、これを実現するため、ロータリーの6ヶ条の綱領、12条の倫理訓を毎日、お経のように唱えた。これにより、自身がその意味する所の真髓を頭にたたき込み、その真の意味を理解し、格調の高い日本語らしい文章を考え出し、日本風のものにまとめ挙げた。そして、これを大連クラブの「ロータリーの宣言」として、クラブ内で、これを唱和するようになった。以下がその内容である。

〈大連宣言〉

- 第1 須らく事業の人たるに先立ちて道義の人たるべし。
蓋し事業の経営に全力を傾倒するは因って世を益せんがためなり。ゆえに吾人は道義を無視していわゆる事業の成功を獲んとする者に与えず。
- 第2 成否を日々に先立ち退いて義務を尽さむことを思い進んで奉仕を完うせんことを念う。自らを利するに先立ちて他を益せむことを願う。最も能く奉仕する者、最も多く満たさるべきことを吾人は疑わず。
- 第3 あるいは特殊の関係をもって機会を壟断しあるいは世人の潔しとせざるに乘じて巨利を博す、これ吾人の最も忌むところなり、吾人の精神に反してその信条をみだるは利のため義を失うよりはなほだしきは無し。
- 第4 義をもって集まり、信をもって結び、切磋し琢磨し相扶け相益す。これ吾人団結の本旨なり。しかれども党をもって厚くすることなく他をもって拒むことなく私をもって党する者にあらざるなり。
- 第5 徒爾なる角逐と闘争とは世に行なわねばならず、協力をもって博愛平等の理想を実現せざるべからず、しかり吾が同志はこの大義を世界に敷かむがために活躍す吾がロータリーの崇高なる使命ここに在り、その存在意義またここに在す。

米山は、第1回地区大会のガバナー再選の挨拶で、この古澤の行動を「大連の古澤氏より過日誠に涙ぐましい話を承ったが、それは大連が熱心で、クラブをサーヴキスの上におく。六の目的、十一のコードを翻譯しお経をよむやうに又、祈るやうにしたいと言ふ希望である。實に感じ入ったのである。」とたたえている。ロータリー第70区第1回地区大会で、古澤は、この大連宣言を発表し、脚光を浴びるとともに、参加会員やクラブの間に議論の旋風を巻き起こすことになる。

大連宣言については、米山梅吉記念館創立35周年記念誌『超我の人 米山梅吉の聲音』(平17.04.28発行)59頁にそのいきさつ、議論の内容などが38、39頁、59～61頁に掲載されている。こちらもご参照されたい。

古澤は、昭和10年過ぎからは、主に日本内地で活動するようになる。同11年5月には、東京RCに入会した。終戦後、日本にロータリーが再開されると東京RCに所属し、同27年に会長に推戴されると、満を持していたかのごとく、新機軸の企画を打ち出した。戦場となったアジア地域への贖罪的な気持ちをこめた、東南アジア地域の若者を対象とした奨学制度たる米山基金委員会を発足させた。これは、後に東京RCだけでなく、全国的な広がりへと発展し、世界でも類い稀な米山記念奨学会へと大変身することとなった。

古澤の確個たる信念とこれを現実のものにしていく原動力、行動力には敬意を感じざるを得ない。その原動

力の源に第1回地区大会の折、多くの会員の前で披露された古澤に対する米山の激賞の言葉により、自己の信念の正しさ、確かさを強く印象づけられたことどもが遠因となっていたと考えられないであろうか。いずれにしても、目的実現に向けた古澤の高い能力には感激の限りである。

…………… 米山記念館からのお知らせ ……………

このたび栃木RCから「栃木の偉人 古澤丈作」の冊子が贈呈されました。ここには大連宣言を現代文に意識したものが掲載され、非常に理解しやすい内容となっています。ご希望の方は、米山梅吉記念館までお問い合わせ下さい。

1925年から、東京RCの週報が北島亘によって作られるようになりました。当時の様子を北島のごんたが語っています。週報作りは、家族総出の手作業によって行われていました。大変ながらも和気藹々とした雰囲気の中で作られた労作は、あちこちで評判になりました。

父 北島亘とロータリー

大正の10年か11年頃だったろうか。よく憶えていないが、何でも12年9月の関東大震災の時、まだロータリークラブが一般にまるで知られていなかったの、その頃の事と思う。父が帰宅して三井の米山さんからご相談を受けService above selfということをもっととしたビジネスマンの、こんなよいクラブがアメリカにあるので、日本にも作つたらどうだろうとご相談を受けた、とって沢山のパンフレットを母と共に読んで研究していた。そしてまもなく数人で創立し、はじめは工業クラブで集つたのではなかったらうか。その時の写真はどこに行つたか…。私の目には工業クラブビルの前に立って、にこやかに笑っている数人の方々の内、米山様、藤野様、星様と父の顔が思い出されるが…。徹底的に「奉仕」することの好きであった父にはロータリーのService above selfの精神がよほど性に合っていたらしく、その頃の父はほんとうにクラブの事に一生懸命であった。

まだ決まった事務所もなかったときは週報も牛込の自宅で日曜日に作られた。木曜の夜帰宅すると印象の薄れない内にと、集会の様子などを書く父のタイプライターの音が鳴りひびく。(当時の大型タイプライターの音はすさまじいぐらい大きかったし、それに父は仲々せっかちだったので、その音はちょっと機関銃のように勇ましく私の耳になつかしく残っている)母がそばからそれを校正する。

もともと父は明治16年16才で単身米国に渡り、グラマースクールからやり直してハーバード大学でドクター

北島メリー・エミ

の称号をとつたくらいだから、その英語は日本人離れがしていた。というより正式の日本語の方がむしろつたなかったのだから、母(米国人)に直してもらう事もなかったのだけれども、何しろ思いの浮ぶまま機関銃のようにタイプを打つたからスプリングなどの間違いがあった。校正しながらよくキャッキョと笑っていた母の声も忘れられない。父の文章はとてもユーモアに富んでいて面白かったという。このユーモアと演説のジョークだけは、父よりもと英語の上手な方々でも他に余り持合せないものではなかったらうか。”Kittyという北島の愛称とこのユーモアたっぷりの文は諸外国ではとても受けて、次週のもの待ち遠しい、とお便りを下さる方もあり、じきあちこちの国のクラブと交換するようになって来たことを思い出す。

謄写版ずりの表紙はちょっと漫画的な絵の特意だった兄が毎号何か書かされた。この下手でも日本的な表紙もまた思いがけず外国では喜ばれたらしい。原紙が出来ると、我が家にあった輪転機で刷るのに子供たち3人がよび出される。毎週それも日曜毎なので遊びたくもあり、時には宿題も山のようにあつたけれども皆で一生懸命にやった。それでもまだ数が少なくて急げば午前中には出来たので午後遊ぼうと、実に一生懸命手わけしてやった。(後略) <ロータリーの友1963年4月号より>



創立50周年事業特別寄付に感謝

このたびの米山梅吉記念館創立50周年にあたり特別なるご寄付を賜り、誠にありがとうございました。当館の活動にご理解、ご支援を賜わり深く感謝申し上げます。皆様からのご厚意は、記念館の事業発展に活用させていただきます。今後とも、末永いお力添えを賜りますようよろしくお願い申し上げます。

特別寄付金総額 77,986,908円 (2020年6月30日現在)

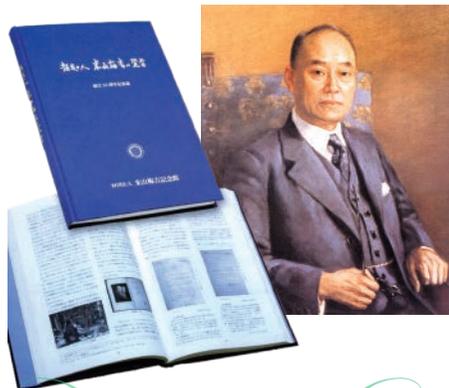
<2020年1月～6月 寄付者ご芳名>

【個人】毛利光男(本巢)・大野正博(本巢)・広瀬達也(本巢)・渡辺勇(本巢)・棚瀬三之(本巢)・松尾昇二(本巢)・渡辺郁雄(本巢)・村瀬孝夫(本巢)・鷺見芳男(本巢)・高見篤志郎(大阪天王寺)・木村正承(大阪天王寺)

【団体】2620地区 藤枝南RC・静岡東RC・浜松南RC・三島西RC・浜松ハーモニーRC・甲府RC・浜松西RC・菫崎RC・三島RC・富士吉田RC・甲府シティRC・河口湖RC

* () はクラブ名、敬称は省略させていただきます。

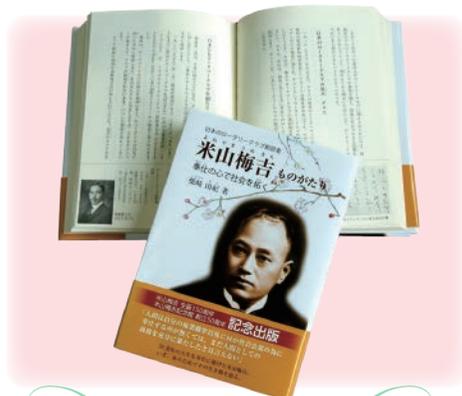
* 2019年12月以前の寄付者につきましては、館報35号に掲載させていただきました。



『超我の人 米山梅吉の聲音』

創立35周年の記念出版。ロータリアン、教育者、社会奉仕者としての米山梅吉研究を集大成した最良の一冊。「米山梅吉の生涯や業績」「ロータリーとのかかわり」「記念館の歴史」など、詳細な解説がなされている。資料編には、講演、月報やラジオ放送なども掲載。館所蔵の図書目録、年表なども網羅されている。

(財)米山梅吉記念館編集・発行
B5判 260頁 2,500円(税込)



『米山梅吉ものがたり』

生誕150年・(財)米山梅吉記念館創立50周年記念事業出版
明治、大正、昭和にわたる激動の日本に「奉仕の理想」を実現した人。我が国ロータリークラブの祖、社会への奉仕を生涯の信条とした、その根源が読み明かされる。

小・中学生から読める【伝記】ジュニアノンフィクションシリーズ
著者／柴崎由紀 令和元年7月 銀の鈴社発行
A5判 280頁 1,980円(税込)

購入ご希望の方は、書名、数量、お名前、連絡先をお知らせください。
商品が到着しましたら同封の振込用紙にて代金をお支払いください。
商品代金の他に、別途送料をご負担ください。

お申し込みは 公益財団法人 米山梅吉記念館
TEL:055-986-2946 FAX:055-989-5101

米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

【開館時間】午前10時～午後4時

【休館日】●月曜日

●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報
Vol.36 秋号

発行日／令和2年9月19日

発行者／公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 積 惟貞

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101

URL <http://yoneyama-umekichi.jp/> E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp